グランビル博士との会合の結果概要

1. 評価・助言者

(1) 氏名

ウィリアム・グランビル博士

(2) 所属・役職

国際持続可能開発研究所（IISD；カナダ）　副所長

(3) 略歴

博士（教育行政学、アルバータ大学、1986 年）

学術副学長（北アルバータ工科大学）

最高執行責任者（国際持続可能開発研究所）

理事（地球環境戦略研究機関）等

(4) 専門分野

戦略的企画立案、科学教育、教育政策

2. 会合の概要

(1) 日時

2013 年 1 月 31 日（木）

(2) 場所

特別会議室（国立環境研究所）

(3) 参加者（敬称略）

ウィリアム・グランビル博士

大垣眞一郎（理事長）

住 明正（理事）

鏑木儀郎（理事）

村上正吾（審議役）

清水英幸（企画部国際室長）

(4) 進め方

まず、大垣理事長が研究所の全体概要を説明し、意見交換の際の手引きとして以下の３つの大きな論点を示しました。

(A) 自らの専門分野から見た国環研の研究の特徴

(B) 環境に係る研究機関としての国環研の特徴および期待する点

(C) 国環研において今後推進強化していくべきと考えられる点

その後、グランビル博士には、自身の専門分野および関心と特に関連性の高い５研究センター（地球環境研究センター、社会環境システム研究センター（以上、地球温暖化研究

プログラムを共同で紹介)、地域環境研究センター、環境リスク研究センター、資源循環・廃棄物研究センター）を訪問頂き、各研究センターにおいて、現場の研究者から説明を受けると共に、研究設備等の見学並びに研究者との自由な意見交換を行いました。その後、これらの情報をもとにグランビル博士が大垣理事長に対してコメントを述べ(以下参照)、広く意見交換を行いました。

3. グランビル博士のコメント

(1) 国環研は、基礎研究から政策関連研究まで全ての環境科学に渡る広い研究範囲をカバーする能力があるユニークな研究所である

国環研について最も驚かされたことは、カバーできる研究分野の広さです。国環研は、基礎研究から政策関連研究まで環境科学の全範囲に渡る前線をカバーできます。世界には、環境分野で研究を実施している同様な研究機関があるかもしれません。しかし、今日までの私の経験では、国環研ほど広い研究範囲をカバーできる研究所があるとは思えません。少なくとも私の経験では、この意味で国環研はユニークであろうと言えます。この（研究の広範な）点が災害環境研究に良く係わっていることも印象的でした。（災害環境研究において）国環研では各分野が重要な役割を演じていますし、環境研究におけるこれらの分野の専門性は更なる貢献を促進するでしょう。

(2) 問題解決のための基礎研究を実施する能力は、国環研の重要な強みの１つである

持続可能な開発の問題に内在する課題に対する解決策を見出すための鍵となるのは、基礎科学の研究成果によってもたらされるデータです。実際に、基礎科学は持続可能な開発の分野に必須です。そのようなデータの１例は、長期モニタリングイニシアチブによって創出されるものです。このような長期的取組みが無ければ、科学に基づいた解決策の提案は不可能でしょう。国環研の研究者による発表（と討議）の間、問題解決の重要性を繰り返し強調しました。いくつかの研究分野はより解決駆動的に思われ、解決策を見出すのが近いと感じました。国環研の重要な強みは、解決策を見出すための基礎研究を実施していることであり、これはさらに強化されるべきと確信しています。

(3) 地方問題・地域問題を解決するための国環研の地域環境研究は貴重であり、国環研はこれらの問題の専門知識を地域・地方のコミュニティーと共有し続けるべきである

国環研が幅広い問題をカバーする地域環境研究（例えば湖沼の富栄養化）を実施していることを興味深いと感じました。このような研究は地方自治体や地域にとって貴重です。IISD も地方環境問題を解決するために重要な役割を果たすことが期待されています。したがって、国環研が地域や地方のコミュニティーとその専門知識を広く共有し続けることを提唱したいと思います。

(4) 国環研の再編は成功であり、日本とアジアのハブ研究機関として活動する可能性を促進するだろう

国環研はその 40 年の歴史に対応した高い研究の技術と経験を持っているという印象を受けます。前回訪問して以降、国環研は実施している 8 つの主要分野に対応する 8 つの研究センターに再編されました。この再編は成功であると信じます。国環研のような規模の研究所にとって、良い組織化は特に重要です。この再編はまた、国環研が（アジア）地域のハブ研究機関の立場で活動することを促進するでしょう。したがって、国環研は日本およびアジアの先導的研究機関としての可能性を有しており、またそのような機関として活動すべきであると信じます。

(5) 国環研は環境問題に関係する他の国内機関と連絡・調整する能力を持つ

環境問題に関連して活動している国内機関はいくつもあります。同様な分野で働いている人々をまとめるために、そのような機関に連絡を付け、調整する能力を国環研は有しています。例えば、国環研と地球環境戦略研究機関（IGES）といった機関には、両機関が仕事を進める共通の分野、1 例としては気候変動問題があります。各々の焦点には基本的な違いがありますが、双方のコミュニケーション経路を開放維持していくメリットは大きいと思います。各々の研究活動の進捗に関して相互に情報共有するため、実務レベルで試験的な定期会合を始めることは良い考えでしょう。IISD もこの意味では同様であり、カナダで他の機関との協力関係を拡大する努力を行っています。私の経験では、そういった協力は長期に渡り徐々に発展し、強化されます。

(6) 国環研が目標を定めて啓発普及するためには、研究成果の利用者の特定が必要である

国環研はその研究成果の市場意識を啓発し、維持するべきです。各々の研究目的によって研究成果の利用者は様々です。例えば、政策関連研究の利用者は基礎科学の利用者とは違います。したがって、国環研が実施する研究タイプが必要な利用者の特定が必要です。適切な対話と取組戦略を用いて、国環研はそのような利用者に目標を定め、啓発普及活動を積極的に行うべきです。

(7) 国環研のキャンパスは研究者や訪問者に良い環境であり、この雰囲気は英語標識によってさらに強くアピールできる

国環研キャンパスには大変良い印象を持ちました。緑と牧歌的な雰囲気には特に感銘を受けました。国環研の研究者は熱心で友好的であり、それゆえこのキャンパスは研究者にとって良い環境であると感じます。外国人研究者もこの健康的な環境から恩恵を受けるでしょう。この環境を強調する 1 つのアイデアとしては、構内を魅力的な雰囲気にする特徴（的施設）に向けて、訪問者のための標識を英語で用意することでしょう。

Dr. William H. Glanville

グランビル博士

Discussions between the International Advisor and the NIES President's Office

理事室との意見交換

Explanation of research using the NIES Vehicle Test Facility

国環研の低公害車実験施設での研究説明

Group photograph after the conclusion of discussions

会議終了後の集合写真